

フォークナー「納屋を焼く」について

—サーティの葛藤再々考—

阿 部 卓 也

「くちすぎの仕事」、*potboilers*、と自嘲的な名で呼びながら、フォークナーは1930年から1950年のあいだに75編ほどの短編小説を書く。幅広い読者の方を向きながらも、しかしそれはフォークナーにとって決してどうでもよい仕事ではなかったことは見るだに明らかだし——MGMのハワード・ホークスのもとでの仕事とはまったく違ったものであったことは間違いあるまい¹⁾——、作家自身、のちの書簡でこう言っている。

A Short story is a crystallised instant, arbitrary selected, in which character conflicts with character or environment or itself. We both agreed long since that, next to poetry, it is the hardest art form.²⁾

短編というのは、「詩に次いでもっとも難しい形式である」。そして、一人の人物が他の人物、環境、自分自身と葛藤に陥るというこの定義にとりわけふさわしい「納屋を焼く」*Barn Burning* が、またフォークナーの短編中でも傑作の部類に入ることは疑いを容れないだろう。³⁾

「納屋を焼く」は『野生の棕櫚』の成功の後、1938年末に、言われるとこ

1) ハリウッドでのフォークナーの立ち位置については、畑中、1997 を参照。

2) To Joan Williams, 8. Jan. 1953 (Blotner, 1977 : 345).

3) William Faulkner 'Barn Burning' in *Collected Stories of William Faulkner* Random House, New York, 1943. pp. 3-25. 以下、この作品の引用については、本文中に括弧を付して頁数のみを記す。

ろでは10日間ほどで書かれ、1939年6月の“Harper’s Magazine”誌に初掲載されてその年の最良の短編としてO. ヘンリー記念賞を受賞、のちに『短編集』に巻頭作品として収録された。このころ、フォークナーは、南部が文学的ルネサンスを迎えているとする Time 誌の Robert Cantwell のインタビューに珍しく応じ、39年の年明けにはスタインベックらとともに National Institute of Arts and Letters の会員に選ばれて、いわば上昇の機運にあった。The Atlantic Monthly では、Conrad Aiken が初めてフォークナーの文体論を試みる。またこのころ、Meta Carpenter とも再会している。⁴⁾

一人の人物が、他の人物、環境、自分自身と葛藤に陥る、という作家自身による短編小説の規定にふさわしい作品として「納屋を焼く」を眺めるということは、必然的に、少年サーティをその中心として読むことに導く。フォークナーが上の書簡に言う conflict がいかなるニュアンスを帯びているかも検討の余地があるが、挙げられている三つの葛藤（他の人物との、環境との、自分自身との）を一身に兼ね備えているのは、ド・スペインはもとよりアブナーでもなく、サーティを措いてない。子供の視点を好んで利用したフォークナーの叙述の視点はここでも明白にサーティ寄りに設定されており、語りはときにサーティを代弁し、ときに第三者的な位置をしめる。ここでは、子供の視点は、一族の歴史を子供の口から語らせることによって神話化する機能⁵⁾は帯びておらず、このサーティ自身とその葛藤がこの短編の中心であると考えることができるだろう。

およそ10歳と見られるサーティは父親との強い結びつきを感じ、父親を誇りに思い、賛嘆しているが、父親が自分たちに強いているのとはちがった生活への憧れも抱いている。父親の絶対的な意志(“that ravening and jealous

4) このあたりの伝記的事実については、Oates を参照。

5) 秋田明満先生は、『町』のチャールズ・マリソンの視点について、「人々が伝説のように語り合っていることを集約的に子供に語らせることによって、その当時の人々の意識を提示し、それを神話化することによって物語に普遍性を持たせようとする意図」を指摘しておられる(秋田, 1997: 77)。

rage” 11) と、子供の目にはド・スペインの屋敷が体現しているかに見える“peace and dignity”(10)に満たされた生活への憧憬が対立する。少年は逆向きの二つの力に引き裂かれるように感じて苦しんでおり(“being pulled two ways like between two teams of horses” 17)、この緊張が解消することを願っている。結局、父親が放火しようとしていることをド・スペインに知らせることで、父親には背を向けることになる。しかし彼はあくまでも父親を愛し崇敬しており、この行動のあとにも“grief and despair”(24)を感じる。自分の介入によって父親は死んだものと思った少年は、家族のもとにはもどらずそのまま遁走する。このあとのサーティがどうなるのかは語られていない。

しかしサーティの葛藤を中心に据える読みは、後述するように、サーティの心理にかかわる叙述に奇妙な空白が存在することと、アブナーの造形の衝撃性にもよったのだろう、必ずしも初めから一般的なものではなかった。「納屋を焼く」の受容史上、もちろんサーティの葛藤に焦点を当てる読みも存在したが、当初はむしろアブナーに、あるいはアブナーとド・スペインの対立に軸を置く読みのほうが優勢だったように見える。アブナーに着目したそのような読みとしては、「フォークナーの悪魔」なるタイトルで、欧米文学の伝統の中の悪魔的なもののイコノグラフィーとアブナーの表象の結びつきを論じた William Bysshe Stein (1961)のほか、Charles Mitchell (1965)などがある。

他方、サーティの葛藤に着目した読みもこれまでには数多く提示されている。しかし Virginia C. Fowler (1982)は、サーティに着目する読みが、概してアブナーとド・スペインの対立と、サーティ内部の葛藤を混同する傾向があると指摘している。Elmo Howell (1959)にとって、「納屋を焼く」の中心的なテーゼは「正しい種類の貴族の効果」であって、サーティは、「サートリスやド・スペインの一族に [...] 代表される [...] 世界に対する賛嘆によって、自分のミリュウから抜け出すことができた」のだということになる(Howell: 18, 13)。この物語でのサーティの重要性に最初に目を向けた Phyllis Franklin (1965)は、「非道徳的なスノープス家と道徳的なサートリ

スの人々の」外的な葛藤が、「サーティにとっては内的な葛藤になる」と言う(Franklin: 193)。Gayle Edward Wilson (1971)もこの延長上にあり、Fowlerは、特にこのWilsonをとりあげて批判している。実際、今、Wilson論文を読む者は、一種ノスタルジックな感慨にとらわれるのではないか。ルース・ベネディクトから借りたアポロ的／偏執的という概念の道具立ても古風だし、法秩序に則った平和なコミュニティのビジョンも、ド・スペインの屋敷の与える“peace and dignity”の印象に魅惑を覚える少年サーティの限られた認識と同等かそれ以上にあまりにナイーブだ。ド・スペインのような地主を単純にアポロ的な秩序ないし正義の側に立つものとみなすHowellやWilsonの論調は、言ってみれば南部神話にどっぷりと浸かって19世紀的な趣を呈し、あまりに素朴に存在被拘束性を露呈しているというべきだろう。⁶⁾もちろんこれはWilsonの問題であって、フォークナーのテキストは、とうていWilsonの読みに回収されてしまうようなものではない。フォークナーがアブナーに言わせている台詞に見られる南部の社会経済構造に対する批判、“tenant farming”や“share cropping”のシステムに対する批判は、いかがわしい人物として描かれたアブナー独特の怒りの色彩に染められているとはいえ、そこに見られる正当性を否定することはできない。大土地所有者と小作人の関係上に成り立つこうした農業経営形態は、南北戦争後の南部で、かつての奴隷制に立脚したプランタージュ経営に代わって登場した。

「納屋を焼く」に語られる出来事は、19世紀末に位置づけられるが、当時も、またこの作品が書かれた時代までも、貧しい小作人と裕福な土地領主の社会的差異は甚だしいものがあつた。サーティが多幸福感に襲われ(“a surge of peace and joy”¹⁰⁾、威厳(“dignity”)を見いだすところに、父親は、他人の労働、搾取のうえに築かれた富を見る。

“That’s sweat. Nigger sweat. Maybe it ain’t white enough yet to suit him. Maybe he wants to mix some white sweat with it.”

6) 「南部神話」については、新納、また後藤を参照。

(12)

そして彼は自分が主人に身体的にも精神的にも支配されているのだと感じている。

“I’ll have a word with the man that aims to begin to-morrow owing me body and soul for the next eight months.” (9)

そうして、息子に、ド・スペイン(やサートリス)のような領主が小作人に対してほとんど無限の権力を振るうシステムが不正不当であることを教えようとする。そもそも、のちには自ら好んで南部紳士風の身じまいを纏うことになるものの、『アブサロム、アブサロム!』で「南部はその経済機構を確固たる道徳の上ではなくて日和見主義と道徳的略奪行為の流砂の上のうち建てた」(Faulkner, 1986: 209)などという台詞を書き付けるフォークナーが、ド・スペインを理想化することは最初からありえない。実際、「納屋を焼く」においてド・スペインがいかにグロテスクな人物として描かれているかを見さえすればよい。ド・スペインは独断的にアブナーに「罰」を科すが、小作人のアブナーのほうが自分を法廷に引き出すことは予期していないし、アブナーとの対決では怒りに自失してむしろ弱い印象を与え、そもそもアブナーのところへやってきたのも、夫人の命令に従ったのこのように見える。そしてそのド・スペイン夫人については、絨毯が汚されたことにヒステリックな悲鳴を上げたことしか読者には知らされていない。物語はサーティの視点から語られており、少年の視線はこの場面の喜劇性を把握していないが、しかし中立的な視点で見れば、総じてこの対決はむしろ喜劇的な様相を強く帯びている(Nicolaisen, 1997: 55)。このような点に目を向けただけでも、Wilsonがド・スペインに割り振っているアポロ的な賓辞がプロクルステス的なもの、間尺に合わないものであることが分かる。

Wilsonのような解釈が可能だったのは、侵犯をこととし、偏執というよ

りはむしろ倒錯と呼び得ようアブナーと、ド・スペイン的な支配者の秩序が共生関係にあること、少なくとも同根であることによっている。ありふれた認識だが、侵犯は、侵犯されるべき法秩序なしには存立し得ないし、法秩序は侵犯の可能性、侵犯者への処罰の可能性ぬきには存立し得ない。Wilsonは、アブナーとともにこの地平の内部を動いているわけだ。そもそもアブナーのほうがド・スペインを法廷に引き出しているのであってその逆ではないことをまず想起すべだろう。

Wilsonを批判した Fowler は、『村』でラトリフが語るエピソードに基づいて、そもそもアブナー自身が、貴族的なものにあこがれ、それに幻滅するところから出発しているのだと言う。だからアブナーとサーティの懸隔は決して大きくはなく、従ってサーティの末路もアブナーからさほど隔たったものではないはずだと予想する。しかしこれは疑わしい。そう言い得るためには、「納屋を焼く」の中にいささか唐突に書き込まれている「二十年後」のサーティの独白を無視しなければならない。

Later, twenty years later, he was to tell himself, "If I had said they wanted only truth, justice, he would have hit me again."(8)

このわずかな台詞に見られる反省的な立場は、アブナーの立場とは明らかに違っている。サーティとアブナーを同一視する Fowler のコメントは、そもそも Fowler 自身が、サーティの理想が実体としての南部の貴族的なものと同視できないと指摘していることと背馳する。ド・スペインの屋敷のたたずまいに投影されるサーティの「平和と威厳」の理想は、ド・スペインその人や「南部貴族」の実体とは一致せず、何かきわめて抽象的なものだというべきではないのだろうか。ド・スペインが一種喜劇的に描かれているだけに、サーティの理想は、南部貴族の誤認において際立っている。Fowler に譲って仮にサーティの出発点がアブナーと同じであったとするなら、サーティはヒステリー化された倒錯者（アブナー）なのだといふべきだろう。ジジ

エクが言うように、倒錯は、その転覆的な見かけとは裏腹に、決して体制そのものをゆるがすことはない。これに対して、(フロイト＝ラカン的な意味での) ヒステリーのほうが、(これも見かけとは裏腹に) 制度にとっては実は危険である(Žižek, 1999: 9-14)。だからこそ、注目されるのは、(倒錯的なアブナーではなく) ヒステリー的なサーティのほうなのだ。少年としてのサーティの根本にあるのが、「他者は自分に何を望んでいるのか」という典型的にヒステリー的な問いであることに注意しよう。だからサーティにとっての問題は、父親もド・スペインも〈他者〉の役割を担い得ない点にあるということもできよう。

サーティの行為を、エディプス的な父親殺しやイニシエーションと見る通俗精神分析的＝自我心理学的な見方もありふれている。たとえば、James K. Bowen and James A. Hamby (1971) は、サーティの葛藤を「人間の、若い、形式的な服従義務と、成熟した、経験的なコミットメントの間の」葛藤と見なし、その苦闘は「通過儀礼」だと言う(Bowen and Hamby: 101)。しかしエリクソン流のアイデンティティ論／ライフサイクル論に乗って「納屋を焼く」にサーティのイニシエーションを見出す読みは、イニシエーションが、制度の内部で制度を維持することをその機能とするものであり、もともとそのような制度が十全に機能していたかに見える社会へのノスタルジックな倍音を伴う概念である以上、このヒステリー症者の破壊性を見ないことになるだろう。イニシエーション論は、(少なくとも見かけ上) 安定した〈他者〉、いわゆる大文字の他者、を必要とする。それはサーティにはまさに欠けているものだ。

サーティが引き裂かれているのは正確には何と何の間なのか。これは Fowler の問いでもあったわけだが、アブナーの行動規範もド・スペインの行動規範も、サーティは自分のものとはしていない。サーティの抱える葛藤は、アブナーの行動規範とド・スペインの行動規範の間の対立ではない。先に述べたように、「平和と威厳」と名付けられているサーティの理想は、ド・スペインの屋敷に投影されたりはするものの、明らかに抽象的なもので

ある。それは農場主の「自由」（この語のきわめて合州国的な意味で）とも、市民社会の法秩序とも決して一致しない。サーティの理想を、ド・スペインや南部貴族制そのものと混同するならば、サーティの葛藤の性質も捉え損なうことになる。

Susan S. Yunis (1991) は、「納屋を焼く」の語り手が、いくつかの点で、アブナーの放火を説明し正当化する方向の記述には言葉を割いていても、それによってスノープス一家が蒙っているはずの苦痛についてはほとんど沈黙をまもっていることに注意を向けている。Yunis が着目しているのは、たとえばよく知られた焚火の場面である。この場面は、少なくとも部分的にはサーティの視点を示しておりながら、サーティの感情については奇妙に語らない。領主の怒りや報復を逃れて、住んでいた家を出て、寒い夜空に小さな焚火に身を寄せあうことを余儀なくされている家族。この場面、サーティがそうした状況が繰り返されることに対する、苦痛、怒り、絶望、そして状況を変えることができないことに対する無力感を感じていても不思議はないが、そのような苦痛を語り手が語ることは決してない。「納屋を焼く」は明らかにサーティの物語であるにもかかわらず、このような部分でサーティよりも父親の暴力の動機のほうに焦点が当てられていることは奇妙に見える、と Yunis は言う (Yunis : 23-4)。あるいはサーティが襟首をとらえられて運ばれていく次のような一節。

Then the boy was moving, his bunched shirt and the hard, bony hand between his shoulder-blades, his toes just touching the floor, across the room and into the other one, past the sisters sitting with spread heavy thighs in the two chairs over the cold hearth, and to where his mother and aunt sat side by side on the bed...“Hold him,” the father said.(22)

いまなら家庭内暴力と呼ばれもしようこの場面について、Yunis は、語り

手がサーティの苦痛については沈黙していることが、暴力(abuse)の犠牲者がしばしば用いる戦略に対応していると指摘している。苦痛も、怒りも、抵抗への衝迫も、感じることを拒否し、さらなる暴力を誘発しかねないいかなる反応も表さないようにすること(Yunis: 25)。

このように指摘する Yunis は、つまるところ、アブナーを、フォークナーの書簡に基づいて、「納屋を焼く」執筆前後の出版社とのかかわりにおけるフォークナー自身に重ねあわせていく(Yunis: 30)。⁷⁾ しかし語り手が、サーティをはじめとするスノープス一家の苦痛について沈黙しているという指摘は、サーティの葛藤を再考するための手がかりにもなるだろう。スノープス一家の苦痛はほとんど直接には語られない。だからこそ多くの論者がその可能性を見落としているのだが、サーティの葛藤は、父親に従うか、父親から自分たちが被る苦痛を終わらせるかというものでもありうる。サーティの理想が託される“peace and dignity”とは、かりに純粹に抽象的なものでないとなれば、むしろこのことにこそ結びつくのではないだろうか。

しかしそれでも疑問は残る。第一に、Yunis が同時に指摘しているように、サーティがアブナーから被っている苦痛について語り手が沈黙していることは、サーティ自身が自らの苦痛自体について意識していなかった可能性をも示す。第二に、サーティの葛藤が父親との「血の絆」と“peace and dignity”の間のものだと見なすことができるとしても、サーティの行為とこの葛藤との関係自体はまだ明らかではない。サーティの行為は、この葛藤から生まれたものであるにしても、対立する二項のいずれかを単純に選択するという性質のものではないし、この行為によって葛藤が「解決」するわけでもない。最後の放火の前、父親は、サーティを「つかまえておけ」(“Hold him” 22)と言って姿を消し、放火を告げられたド・スペインはサーティを「つかまえる！」(“Catch him!” 23)と叫ぶが、少年がいずれの拘束からも抜け出して

7) アブナーがド・スペインの要求によって絨毯から馬糞を落とし、さらに絨毯を傷めたように、フォークナーは出版社の要求に応じて『野生の棕櫚』から‘shit’などの語を削った。

しまうことは暗示的だ。彼は、二項のいずれの方向でもなく、第三の、形の定まらぬ方向に向かって駆け出しているように見える。“He did not look back.”(25)ここでサーティがなんらかの法、掟に従っているとしても、その掟を意識しないままに従っているというべきではないか。サーティの行為は、「他者は自分に何を望んでいるのか」というヒステリー的な問いに対するアクティングアウトにも見える。サーティの行動は、むしろ pathologisch (カント)⁸⁾なものを欠いたきわめて破壊的な無償の倫理的行為（これもカント的な意味で）と見るべきなのではないか。フォークナーは少年が感じている「血の絆」についてくりかえし語っている。“the old fierce pull of blood”(3). “the old blood which he had not been permitted to choose for himself”(21). 執拗に「血の絆」について語ることによって、それにまったく逆らうものであるサーティの父親に対する裏切り行為が、唐突に、いわば本能的に行われたことが強調される。つまりこの行為には、意図がない。より正確に言えば、意図された目的がない。だとすればつまり、pathologisch ではない、真正な「倫理的」行為としての資格を持っている可能性がある。そうした行為について、ジジエクは言う。

あるいは、倫理の領域に関していえば、いかなる意識的な倫理的な掟も最小限“pathologisch”なもの、なんらか特殊な利害関心によって染められているのではないのか、したがって、純粹に倫理的な命法の唯一ほんとうのあり方は無意識なものではないのか。われわれが真に倫理的に行動するのは、掟に従いながら、その掟が掟としては忘れられていなければならない、そんな場合に限られるのではないか。そしてそのような忘れられた掟のみが真に絶対的でありう

8) 通常「病的」などと訳されよう pathologisch は、カントにあっては行為が倫理的であるか否かの決定的な基準になっている。なんらかの動機や目的をもったあらゆる通常の行為は pathologisch である。このため、『実践理性批判』波多野精一、宮本和吉、篠田英雄訳、岩波文庫、1979年では、この語は単に「パトローギッシュ」と音訳されている。

るのではないか。(Žižek, 2001 : 8)

ジジエクはまた別のところで、次のように言っている。

[...] 選択を迫られた主体が「狂った」不可能な選択をして、ある意味で自分自身を撃つこと、自分のもっとも大事なものを撃つこと。この行為は、不毛な攻撃性が自分に向かうといったものではなく、むしろ主体が置かれた状況の座標を変化させる。敵が手中に収めているかけがえのないものから自分を切り離すことによって、主体は解放され、自由に行動する空間を手に入れる。こうして「自分を撃つ」ラディカルな身ぶりこそが、主体そのものを構成しているのではないか。(Žižek 2000 : 122)⁹⁾

「血の絆」と呼ばれた父親との紐帯を引きちぎるサーティの行為は、この「自分自身を撃つ」選択だったとは言えないか。そしてこの決断は決定不可能な場での文字どおりの決断であるとは言えないだろうか。エルネスト・ラクラウの言う「底知れぬ決定不可能性」の上に行われた、事態の構造や合理性といったいかなる根拠ももちえない決断。そこでこそ主体が析出することになる決断（ラクラウ：104-116）。ラクラウにとって、主体とは「構造の決定不可能性と決断との隔たり」にほかならない（ラクラウ：104）。

主体が現れる状況はすべて、構造的決定の生み出す [...] 効果であって、構造の外部に構成された実体的意識というようなものは存在しない。だが構造が本質的に決定不可能だからこそ、決断が要求されるのであって、[...] 構造があらかじめ決定することはない。このことこそ主体の置かれている状況とは異なるものとして主体が出

9) 訳文は、バトラー、ラクラウ、ジジエク『偶発性・ヘゲモニー・普遍性』竹村和子、村山敏勝訳、青土社、2002年によった。ここでは163頁。

現する契機なのである。(ラクラウ：110-111)

つまりサーティの「決断」は、まさに南部の社会経済システム、権力関係(土地領主とプアホワイトの、父と子の)、スノープス一家のミリューといった「構造」の裂け目に登場するのだ。リチャード・ローティ(ローティ：133)が信じているのと違って、ここでは決断は「熟慮の結果」ではない。それはサーティが子供であって理性的な判断ができないからではなくて、構造が解を与えないからだ。そしてこここそ、「主体」が出現するのであり、この主体は「主体の置かれている状況とは異なるもの」である。

まさにこうしたことこそ、フォークナーが、「納屋を焼く」を『村』の序章に据えることを取りやめ、独立した短編として発表したことを説明する。『アブサロム、アブサロム!』のクエンティンが、ハーヴァードへ行こうと本質的にはヨクナパトーフアを出ることがない(それどころか『アブサロム、アブサロム!』が書かれた時点で「既に死んでいる」)のに対して、サーティの行為は、アブナーとド・スペインの相補的な対立関係の上に成り立つ世界を、ヨクナパトーフアを、抜け出てしまう。あるインタビューで、複数の作品に登場する人物について、その間に「成長」するのではなくて、別のパースペクティブから眺められているだけであって、同じ人格でありつづけているのかという質問に対して、フォークナーは肯定をもって答えている(Gwynn und Blotner：39)。だから逆に、サーティはスノープス三部作に再登場することはなかったのだ。

主体の(行為者の)アイデンティティについて。真正な行為は、わたしの内的な性質を表出/現実化するのではない——むしろわたしは自分を、アイデンティティの核を定義し直すのである。(Žižek, 2000：123-4)

二発の銃声に、自分の行為が父の死を招いたと信じて、遁走するサーティ

の新たなアイデンティティは、そこで間違いなく変容しているが、この物語では明確な輪郭を描くには至らない。もちろん物語というのはつねに事後的なものであって、そこでは一見この決断も納まるところに納まっているかの感がある。しかしこの決断-行為が、あらゆる意味で開かれたものであること、開かれたままになっていることは見落としてはならないだろう。

(筆者は関西学院大学商学部助教授)

参考文献

- Faulkner, William. *Absalom, Absalom! The Corrected Text*. New York : Random House, 1986.
- _____. "Barn Burning." *Collected Stories of William Faulkner*. New York : Random House, 1943. 3-25.
- Blotner, Joseph (ed.) *Selected Letters of William Faulkner*. New York : Random House, 1977.
- Bowen, James K, and James A. Hamby. "Colonel Sartoris Snopes and Gabriel Marcel : Allegiance and Commitment." *Notes on Mississippi Writers* 3 (1971) : 100-9.
- Fowler, Virginia C. "Faulkner's 'Barn Burning' : Sarty's Conflict Reconsidered." *College Language Association Journal* 24 (1982) : 513-522.
- Franklin, Phyllis. "Sarty Snopes and 'Barn Burning'." *Mississippi Quarterly* 21 (1968) : 189-193.
- Gwynn, Frederick L, and Joseph L. Blotner. *Gespräche mit Faulkner*. Bremen und Hamburg : Achilla Presse, 1996.
- Howell, Elmo. "Colonel Sartoris Snopes and Faulkner's Aristocrats : A Note on 'Barn Burning'." *Carolina Quarterly* 11 (1959) : 13-9.
- Mitchell, Charles. "The Wounded Will of Faulkner's Barn Burner." *Modern Fiction Studies* 11 (1965) : 185-9.
- Nicolaisen, Peter. *William Faulkner mit Selbstzeugnissen und Bilddokumenten*. Reinbek bei Hamburg : Rowohlt, 1981.
- _____. Nachwort. *Fremdsprachentexte. William Faulkner 'Barn Burning'*. Stuttgart : Reclam, 1997. 47-62.
- Oates, Stephen B. *William Faulkner. Sein Leben, sein Werk*. Trans. Matthias Müller. Zürich : Diogenes, 1977.
- Stein, William B. "Faulkner's Devil." *Modern Language Notes* 76 (1961) : 731-2.
- Wilson, Gayle E. "'Being Pulled Two Ways' : The Nature of Sarty's Choice in 'Barn

- Burning'." *Mississippi Quarterly* 24 (1971) : 279-288.
- Yunis, Susan S. "The Narrator of Faulkner's 'Barn Burning'." *The Faulkner Journal* 6 (1991) : 23-31.
- Žižek, Slavoj. *Sehr innig und nicht zu rasch. Zwei Essays über sexuelle Differenz als philosophische Kategorie*. Wien : Turia und Kant, 1999.
- _____. "Class Struggle or Postmodernism? Yes, please!" Butler, Laclau and Žižek. *Contingency, Hegemony, Universality*. London : Verso, 2000. 90-135.
- _____. Vorwort. Zupančič, Alenka. *Das Reale einer Illusion. Kant und Lacan*. Frankfurt a.M. : Suhrkamp, 2001. 7-12.
- 秋田明満「The Town にみる社会機構と人間との関係」『商学論究』第44巻第4号、関西学院大学商学研究会、1997年、75-87頁。
- 後藤和彦「南部、畏怖すべき空間」『ユリイカ 特集フォークナー』青土社、1997年12月、120-127頁。
- ジジェク「階級闘争か、ポストモダニズムか？ ええ、いただきます！」バトラー、ラクラウ、ジジェク『偶発性・ヘゲモニー・普遍性』竹村和子、村山敏勝訳、青土社、2002年、123-181頁。
- 新納卓也「南部神話とフォークナー」『ユリイカ 特集フォークナー』青土社、1997年12月、164-171頁。
- 畑中佳樹「ハリウッドのフォークナー」『ユリイカ 特集フォークナー』青土社、1997年12月、158-163頁。
- ラクラウ「脱構築・プラグマティズム・ヘゲモニー」、シャンタル・ムフ編『脱構築とプラグマティズム』青木隆嘉訳、法政大学出版会、2002年、91-130頁。
- ローティ「エルネスト・ラクラウへの応答」、シャンタル・ムフ編『脱構築とプラグマティズム』青木隆嘉訳、法政大学出版会、2002年、131-145頁。